幻夢抄録―目覚め―５章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻夢抄録―目覚め―５章

【Ｎコード】
Ｎ０８１１Ａ

【作者名】
維月十夜

【あらすじ】
呂山の衙での出来事に、互いの気持ちが、急速に近づいた二人。荒野を行く最中、瑪瑙が氷魚にプロポーズして！？異界が舞台の、壮大スペクタクル。

幻夢抄録―目覚め―荒野の夜

大通りへ歩きながら、瑪瑙はさりげなく、氷魚と手を繋いだ。
「あ…」
「始めから、こうしとけばよかったな…すまん」
「ううん、いいよ…もう。あっ！見てよっ、なんか売ってる、ネックレスとかかなぁ？」
「ああ…ありゃ、玉石商だな。装身具を売ってるんだよ」
「ふうん、露店商みたいなものか…」
「見るか？」
「もちろんっ！」
満面の笑顔で言って、氷魚は、繋いだ手を、強く握り尚した。

二人が、露店商に近づくと、威勢のいい声が迎えた。
「おや、いらっしゃい！兄妹仲がいいねぇ」
迎えてくれたのは、大分、年かさの女だった。
「おばちゃん、俺たち、兄妹に見えンのかよ？」
「め、瑪瑙ってば…」
機嫌を損ねた瑪瑙を、氷魚は、慌ててなだめた。
「そりゃ失敬だったよ、それじゃ、あんたたちは恋人かい？」
氷魚が、恥ずかしそうに身じろぎしたが、構わず、瑪瑙は言った。
「ああ」
「そうかい。で、なにがいいかい？耳磀（ピアス）でも何でもあるよ」
「うわぁ、キレイ…」
氷魚は、鮮やかな、緑色の石のついた耳磀を、手にとって微笑んだ。
「ヒスイだね、髪の赤に映えて、きっとよく似合うよ」
「ホント？似合いそう？ねえ、瑪瑙」
「あ？ああ、うん、そうだな」
瑪瑙は、氷魚に気づかれないように、小さな包みを懐に隠す。

「む、何よそれぇ…ヒトの話、ちゃんと聞いててよねー」
「わ、悪かったって…もう、いいのか？」
「うん、次いこう、次っ！」
「そうか、おばちゃん…俺たち、もう行くな？」
「あいよ、まいどあり。頑張るんだよ？」
「おう」
氷魚は、なんの話だろう、と思ったが、それは聞かないでおいた。

辺りは、すっかり暮れなずみ、月が出ている。
二人は、衙を離れて、月光が、青白く照らす荒野を歩いていた。
「疲れてないか？」
瑪瑙は、立ち止まって、氷魚に振りむいた。
「ヘイキ」
瑪瑙は、しばらく氷魚を見てから、背中を向けて、横道にそれた。
「ちょ、ちょっと瑪瑙？どこ行くの、そっちじゃな…い」
「休む、お前なら、そう言うと思ったからな」
「…ごめん」
「いいんだよ、別に、謝ンなくて。それに、丁度いいしな」
「なにが？」
「いいモンやるよ、氷魚」
「なぁに？ヘンなことじゃないでしょーね？あんたなら、有り得る」
「ちーがうって、ったく、ちっとは信用しろよな」
「冗談よ、じょーだん」
「これだ、指環（ゆびわ）じゃねぇのが残念だが、受け取ってくれねぇか？」
瑪瑙は、懐から小さな包みを取り出して、氷魚に差し出した。
「なあに？開け、てもいい？」
包みを受け取った氷魚は、瑪瑙に訊いた。
「ああ、きっと…お前も気に入るよ」
「何だろう…」
包みを開いて出たのは、先の玉石商で、氷魚が見ていたものと同じ、

一対の、翡翠(ひすい)のピアスだった。
「瑪瑙…これっ」
「すまないな、氷魚。ホントは指環と思ったんだが…こンくらいしか、買ってやれなかった」
そんな瑪瑙に、氷魚はかぶりを振る。
「そんなことないよっ、あたし…嬉しいっ」
照れて、はにかむ氷魚を、瑪瑙は抱き寄せた。
「瑪瑙？」
「人間(むこう)も、同じだったよな？」
「え？」
一瞬、何のことだろう、と瞠目してから、氷魚は赤面した。
瑪瑙が、何を言いたいのか、理解(わか)ったからだ。
「これ、もしかして…プロポーズなの？」
「氷魚、そばに…いて欲しい、ダメか？」
真剣な、彼の目に見つめられて、氷魚は、さらに赤くなった。
「そっ、そんな…ダメ、じゃないよ」
「不幸な思いはさせねぇ、だからっ…」
「瑪瑙、あたしは…」
答えを待つ瑪瑙に、氷魚は、柔らかく、微笑んで言った。
「ありがとう、あたしでよければ、側においてください…」
その先を、氷魚は言うことができなかった。
驚喜した瑪瑙が、唇を奪ったからである。
その夜、二人は、二度と離れなかった。
「なんで泣く？泣くな…」
氷魚の瞼に口づけ、そっと涙を拭ってやる。
「だって、幸せなのよ…すごく」
「氷魚…」
まどろみながら、幸せをかみしめ、瑪瑙は目を、閉じた。
夜が、開け始めていた。

幻夢抄録―目覚め―幻夢

（氷魚…おいで、おいで…目を、開けてごらん）
（霧で、なにも見えないわ…あなた、誰なの？）
（こっちだ、おいで）
手が、差し出される。その手は、白く細い。
（白い手、女の、人？）
手をとると同時に、立ちこめていた霧が、晴れていった。
（あなた！あたしとそっくりっ、も、もしかして）
彼は、柔らかく微笑んでから、氷魚の手を放した。
（俺は…氷魚、君の兄だよ…君に、伝えたいことがある）
（え…伝えたい、こと？）
柘榴（ざくろ）は、哀しげに頷いた。
（氷魚、君を、守ってやれなかった…すまない）
（兄、さん…）
（村を、頼む。瑪瑙と、…に…）
（なに？なんて言ってるか、分かんないよ！ねえ、兄さんっ）
再び、深い霧がたちこめ、なにも見えず、聞こえなくなった。

「氷魚！？なにやってンだよお前！」
氷魚は、瑪瑙の声に、我に返った。
氷魚は、浅い湖、といっても、腰くらいまでしかないのだが――の中ほどに浮いていた。
確かここには、水浴びに来たはずだが、どうしたのだろう？
水を漕いで、瑪瑙が近づいてくる。
その時、改めて自分が、一糸纏わぬ姿であるのに、氷魚は気がついた。
「きゃあっ！こ、こっちこないでよっ！」
慌てて、瑪瑙に背を向ける氷魚。

「今更だっ、いいから来いっ！」
瑪瑙は、氷魚を掬い上げると、着ていた外套を脱いで、彼女を包んだ。
「瑪瑙…あたし」
「どうしたんだよ！？どっか、具合悪かったのか？早く着替えてこい、風邪ひいちまう」
「う、うん」

「で？どうしたんだよ…なにがあった？」
歩きながら、瑪瑙は、氷魚の顔を心配そうに覗きこんだ。
「あたし、よく分かんないけど、夢…見てたみたい」
「夢ぇ？」
瑪瑙は、ひょい、と片眉を上げる。
「うん、赤い髪の、男の人が出てきてね、自分は、あたしの兄だって、言ってたのよ」
「柘榴だ！他にっ、他に何か言ってたか？」
「あたしに、謝ってたわ、守れなくて、すまない。後は、村を頼むって」
「そうか…あいつらしいぜ、感謝してやんなきゃだな。あいつが、俺たちを引き合わせたんだ」
「そうね…」
（ありがとう、兄さん…お陰で、こんなにも、大切な人に出逢えた）
「お、そろそろ見えてきたな。あの丘を二つ越えたら、俺たちの村がある」
「ついに、着くのね」
氷魚は、感慨深く言った。
もうすぐ着くのだ、氷魚の故郷に。
彼女が、人としてではなく、本来、生きるべき世界に。
「ああ」
瑪瑙は、強く、氷魚の肩を抱き寄せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0811a/

幻夢抄録―目覚め―５章

2010年10月15日19時35分発行